

牡丹社事件

平野久美子
Kumiko Hirano

マブイの行方

日本と台湾、それぞれの

和解

日台の近代史は、
この事件から始まった!

犠牲者のマブイ(魂)を想い、百数十年の時空を超えて
向きあった遺族たち。加害と被害の歴史をめぐって
繰り広げられた知られざる和解劇を描く力作ノンフィクション。

集広舎 定価 本体1852円+税

そう、優しさにおいては優劣つけがたいのが、琉球と台湾の人々だ。

和解のゴール

第四章で、牡丹社事件のシンポジウムや和解行動に協力をしている黄智慧さんの名前を出したが、彼女は日台関係に精通し、台湾のポストコロニアル状況をエスニックグループごとに調査分析、研究成果を社会に還元してきた行動力を持つ文化人類学者である。二〇〇四年、牡丹社事件の日本語、中国語、英語によるおびただしい歴史資料をデジタル化し、現地の牡丹郷立図書館に還元する企画に関わり、その後も一連の活動において、パイワン族の人々をサポートしてきた。

二〇一九年、ちょうど旧正月の日に、私は久しぶりに黄智慧さんにお目にかかった。台北市大安区に立つ昭和初期の日本家屋群の保存活動の中心人物でもある黄さんは、台北でこの夏に開催するイベントのために東京でも奔走し、その帰国前日に訪ねてきてくれた。「有朋自遠方来 不亦乐乎」（朋有り、遠方より来たる。亦た楽しからずや）という言葉通り、時間を忘れるひとときだった。その彼女が、牡丹社事件にちなんでこんなエピソードを披露してくれた。

「二〇〇四年の年末に、事件の資料をデジタル化して牡丹郷に寄贈したのですが、そのお礼にと、翌年の四月に屏東から牡丹郷の林さんたちが遠路はるばるバスに乗って私の職場（中央研究院）へいらしたんです。革に彫刻した壺絵を額に入れた飾り物と、特産のタマネギを農作業用の網袋に

ぎゅぎゅぎゅう詰めにした大きな袋をふたつも担いで……。こんなにも大量のタマネギをいただいたパイワン族の文化なの。返礼の文化です」

原住民文化に詳しい黄さん

ぎゅうぎゅう詰めにした大きな袋をふたつも担いで……。こんなにも大量のタマネギをいただいでびっくりです。さつそく職場の全員に配り、みんな喜んでくれたことを思い出します。それがパイワン族の文化なの。返礼の文化です」

原住民文化に詳しい黄さんはさらに続けた。

「パイワン族だけでなく、台湾の原住民の各族には昔から和解の伝統文化があるということご存じですか？ 紛争を解決するだけではなく、また相手に苦痛を与えたら、責任を担う。それが自然界や神様とも和解をするのです。彼らは人と人との和解だけでなく、疫病や災害がもたらされたら、それが千年以上も長い間、ひとつの島で多くの部族と共生してきた台湾原住民たちの知恵。

だからバジロクさんは琉球民を殺害した先祖の行いが、宮古島の子孫たちにどれだけの苦痛を与えたかと心を痛め、責任を持って和解の先頭に立ったのだ。私は黄さんの話を聞いて、バジロクさんの求道者のような表情を思い出した。

「今の原住民は敬虔なキリスト教信者が多いのです。百四十年も経った歴史上の事件に対して求めるのは、クリスチャニックな表現の『愛と平和』という、村の誰にでも理解できる、今日的な価値観です」

この話を聞いて、和解のシンボルとしての石像に、「愛と平和」という名が付いたことも納得できました。

黄さんに、ぜひ意見を聞いてみたかったのは、最終的な和解に向けて、どのような努力が必要かということだ。又吉さんも「実はなかなか難しい」と話していたが、率直に言ってどうなんだろう。

すると彼女は学者の顔になり、ちよつと改まった調子でこう言った。

「牡丹社事件は、当事者の集団が多岐にわたるため複雑で、国籍も言語も文化も立場も歴史認識も違う。史実を理解しようとすれば多言語能力が必要です。だから難しいんです」

「多岐にわたる集団というと、琉球民、クスクス社、それから……」

「牡丹社、客家人、琉球王府、明治政府、清帝国と、関係集団は少なくとも七つです。さらに、被害者と加害者の立場が入り組んでいることや時間の経過で政治状況が変化していることも、いわゆる真相を解き明かす壁になっていますね」

その視点で見れば、確かに壁は高く道のりは険しそうだ。しかし、和解の努力は日本でも台湾でもここ数十年続いている。

いくつも日台間の、複雑なポストコロニアルにおける和解の課題を扱ってきた経験から、「私が考える和解のゴールは」と言いながら、黄さんは次のみつつを挙げた。

- 一、和解のベースとは、痛みを互いに分かちあえる人間性にある
- 二、和解の目的を、未来の共生のためであると明確にする

三、和解のルールを作り、独立した第三者も入れて話しあい、公益化する

こうした努力目標を掲げながら、真摯にいくつもの集団が向きあえば、和解は見えてくるのではないだろうか。まだ道のりは遠いだろう。だが今日も努力を続ける人々が現にいる。許しあう人間の心を信じたい。

頭職の末裔は今

二〇一八年八月。アスファルトがべたつくほど朝から暑い日、私は最後の取材に出かけた。

長崎駅前のバスターミナルを定刻通り出発した高速バスは、長崎自動車道経由で佐賀県へと入り、その後大分県の別府湾を車窓はるかに見やりながら、JR大分駅付近の停留所へと私を運んだ。ちよつと四時間の旅だった。

停留所の近くにタクシーが並んでいたので声をかける。

「お願いします、仲宗根病院まで」

運転手さんは、前部席のミラーをのぞきながら、こんなことを言う。

「駅前からかなりありますけどいいですか？」

「いいですか？」と言われたって、ほかの行き方がわかりません」